今日のイラスト 494「 イラストでたどる萩往還㉟　三田尻御茶屋(英雲荘)」 古谷眞之助

イラストでたどる
萩往還

35 三田尻 御茶屋(英雲荘)

藩主専用の宿泊施設である「御茶屋」は萩往還沿いの佐々並、山口にも設けられていたが、ここ三田尻御茶屋（七代藩主重就の法名に因んで英雲荘ともいう）は最大規模のもので、迎賓館的要素を持つものだった。文久3年、京都での政変により都落ちした七卿がまず腰を落ち着けた場所としても有名で、その当時は二階から穏やかな瀬戸内海を眺められた。また戦後の一時期には、広間の畳を取り払って進駐軍の将校クラブのダンスホールとして使用されていたこともあったという。

平成22年に保存復元工事が完了し、その後庭園内の水路に水が引かれて往時の雰囲気を完全に取り戻している。現存する唯一の御茶屋でもあり、是非見学をお勧めしたい。

文・イラスト＝古谷眞之助

本文にも書いたように、三田尻の御茶屋は山陽道に面していることもあって、迎賓館的役割も持っていた。七代重就公は隠居後に側室 3 名とここに住み、そのため建物は現在よりもはるかに大きなものだった。重就は藩財政の立て直しを断行し、撫育制度を設けた有能な藩主だったから、それくらいは十分許されたのだろう。ただし、彼の死後には規模は元に戻されたという。萩藩では、宝暦 13 年(1763)の検地により新たに得た 4 万 1,608 石を藩の本会計に繰り入れずに本会計とは別の独立財源として確保し、その他の財源も加えて藩財政改革の諸事業(埋立事業、産業奨励、投資運用)に充て、その担当部局として撫育方を設けた。いわゆる撫育制度と呼ばれるものである。その一つとして三田尻で大規模に行われたのが製塩業だった。塩というと赤穂が有名だが、ここで生産される塩は北前船によって東北、北海道まで運ばれ、そこでは塩のことを別名「三田尻」と呼んだと伝わるから、大変な生産量だったことが分かる。正しいかどうかは心許ないが、筆者が諸資料から推計した藩の年間の生産量は 140 万トンになった。それはさておき、藩は撫育制度によって財政改革を成し遂げ、幕末にはこの潤沢な資金によって最新式の武器を購入して大きな軍事力を確保し、四境戦争、戊辰戦争に勝利したことはつとに有名である。幕末には実質石高は 100 万石に達していたと言われ、明治 4 年時点での撫育金残高は 100 万両もあり、うち 70 万両が新政府に収められたとも伝わる。

藩内には参勤用だけでなく、藩内巡視用も含めて御茶屋は 17 ヵ所あったそうだが、もちろん三田尻御茶屋の規模は縮小後も最大で、かつ現存しているのはここだけである。2 階建ての建物部分は檜皮葺(ひわだぶき)という檜の皮で覆った豪勢な造りで、三条実美らは山口市の湯田の何遠亭と氷上の真光院に移動するまでの約 2 ヶ月、この 2 階に滞在していたと伝わる。ここには実美自筆の「大観楼」の額が掲げてあるが、実はレプリカで、本ものは防府市のさる場所に保管されているのだとか。また奥の瓦葺の屋根は、お椀を伏せたようにゆっくりと下向きにカーブしている。わが国固有の建築様式で、このような造りを「むくり屋根」と言う。庭には池があり、かつ水路が設えてある。ここに水が引かれたのは 2019 年のことだった。これによって三田尻御茶屋は完全に復元されたことになる。ところで、明治になって公爵毛利家は多々良に本邸多々良邸をつくるが、ここは引き続き三田尻邸として利用された。当時の当主は敬親の孫の元昭公。公の後妻は実美の三女美佐子というから、七卿落ちの時から両家は因縁があったことになる。(2022.2.23 記)